

9. 国語

9.1. 言葉

9.1.1. 「風の便り」と「風の噂」

「どこからともなく伝わってくる消息やうわさを耳にすること」を「風の便りに聞く」という。
「風の噂」は誤用である。

9.1.2. 「うる覚え」と「うろ覚え」

「うろ」は「確かでない」ことを表す接頭語で、「うろ覚え」は「はっきりしない記憶」や「ぼんやり覚えていること」の意味。
「うる覚え」は誤用である。

9.1.3. 「公算が強い」と「公算が大きい」

「公算」は「あることが起こる見込み、可能性」のことだから、これに呼応する語は「強い・弱い」ではなく「大きい・小さい」になる。
「公算が強い」は誤用である。

9.1.4. 「必死の覚悟」と「決死の覚悟」

「決死の覚悟」は「死ぬ覚悟で事に当たること」。
「必死の覚悟」は誤用である。

9.1.5. 「飛ぶ鳥跡を濁さず」と「立つ鳥跡を濁さず」

「鳥が水辺を去る時は、水辺を濁さず、澄んだままにして飛び立つ」という意味なので、「飛んでいる鳥」ではなく「飛び立とうとしている鳥」。
「飛ぶ鳥跡を濁さず」は誤用である。

補足: 慣用句を覚える

嵐が峠を越える(「嵐の峠を越す」は誤用)

押しも押されもしない(「押しも押されぬ」は誤用)

的を射る(「的を得る」は誤用)

9.2. 方丈記 (作者: 鴨長明)

おほかた、この所に住み始めし時は、あからさまと思ひしかども、今既に、五年を経たり。仮の庵も、やや故郷になりて、軒に朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから、事の便りに都を聞けば、この山に籠りあて後、やむごとなき人のかくれ給へるも、あまた聞ゆ。まして、その数ならぬ類、尽してこれを知るべからず。度々の炎上に滅びたる家、またいくそばくぞ。ただ、仮の庵のみ、のどけくして、恐れなし。

下線部の意味を考えると

・「やむごとなき人」…「**高貴な人**」 ・「かくれ給へる」…「**お亡くなりになる**」

・「数ならぬ類」…「**とるに足りない人**」 ・「尽して」…「**到底**」

・「これを知るべからず」…「べからず」は可能の意味の「べし」の否定形で「**できない**」の意味

上記から、「**高貴な人の亡くなられた話も数多く聞こえてきた。まして、とるに足りない人の死んだ例は到底知りつくすことはできない。**」という意味になる。

9.3. 掛詞

9.3.1. 大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立

作者は和泉式部の娘である小式部内侍(こしきぶのないし)。歌人として知られた母がいなくてはいいい歌が作れないだろうとからかわれた時に、返事として作った歌。「いく野」に地名の「生野」と「行く」、「ふみ」に「文」と「踏み」を掛けてある。表の意味は「大江山を越えていく生野への道は遠いので、まだその向こうの天の橋立には行ったことはありません」だが、裏に「まだ母からの手紙は見えていません」の意が込められている。

9.3.2. 難波江の 蘆のかりねの ひとよゆゑ みをつくしてや 恋ひわたるべき

皇嘉門院別当(こうかもんいんのべっとう)。「かりね」に「刈根」と「仮寝」、「ひとよ」に「一節」と「一夜」、「みをつくし」に「滞標」と「身を尽くし」を掛けてある。「難波江の蘆の刈根の一節のように、ほんの短い旅の仮寝の一夜のために、私は身をつくしてあなたを恋ひ続けるのでしょうか」

9.3.3. いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふこのへに 匂ひぬるかな

伊勢大輔(いせのたいふ)。「このへ」に八重桜に対する「九重」と、「宮中」の意味を掛けてある。「むかし奈良の都に咲いていた八重桜が、今日は京の都の宮中でいっそう美しく咲き匂っています」

9.3.4. 世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

藤原俊成。「思ひ入る」に「思いつめる」と「(山に)入る」を掛けてある。「世の中には憂いから逃れる道はないのだなあ。思いつめて入ってきたこの山の奥にも、わびしげに鹿が鳴いている」

補足: 掛詞が入っていない歌

・ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば ただ有明の月ぞ残れる

藤原実定(ふじわらのさねさだ)。「ほととぎすの声のする方をながめてみると、もうほととぎすの姿はなく、ただ有明の月だけが空に残っているよ」

9.4. 敬語表現

9.4.1. いらっしゃる

正:「社長は会議室にいらっしゃいますか？」

誤:「社長は会議室におられますか？」

9.4.2. お疲れ様

正:「課長、遅くまでお疲れ様です。」

誤:「課長、遅くまで御苦労様です。」

9.4.3. とんでもない

正:「とんでもないことでございます。」

誤:「とんでもございません。」

9.4.4. まいる

正:「先生は何日にいらっしゃいますか？」

正:「先生は何日に行かれますか？」

誤:「先生は何日にまいりますか？」

補足: 尊敬語・謙譲語

	尊敬語	謙譲語
行く	いらっしゃる・行かれる	まいる・うかがう
来る	いらっしゃる・来られる・お見えになる	まいる
食べる	召し上がる	いただく
言う	おっしゃる	申し上げる
聞く	聞かれる	うかがう
見る	ご覧になる・見られる	拝見する

9.5. 俳句の季語

9.5.1. 草臥れて宿借るころや藤の花

松尾芭蕉。季語→『藤の花』で春。「草臥れて」→「くたびれて」。

9.5.2. 目には青葉山ほととぎす初松魚

北村季吟(きぎん)の門下だった山口素堂(そどう)。
季語→「ほととぎす」と「初松魚(はつがつお)」で夏。

9.5.3. 寂として客の絶間の牡丹かな

与謝蕪村(よさぶそん)。季語→「牡丹(ぼたん)」で夏。「寂」の読みは「せき」。
「賑わっていた牡丹園の客がいつとき途絶えた。その寂然とした空間にこそ、艶麗な牡丹がひととき美しく輝く」

9.5.4. 菊の香や奈良には古き仏たち

松尾芭蕉。季語→「菊」で秋。
「九月九日の重陽の節句の日、奈良の古い御仏たちは菊の薫りに包まれている」

9.5.5. 岩はなやここにもひとり月の客

向井去来。季語→「月の客」で秋。
「月の美しい夜に岩の突端に月を眺めている風流人を見つけた」

補足: 季語

麦秋(ばくしゅう)…麦は初夏に熟すので「夏」の季語。

柳・青柳・若柳・柳陰…「夏」の季語だと考えやすいが、芽吹いたばかりの青々とした葉が美しいので「春」の季語である。

小春・小春日・小春日和(こはるびより)…立冬を過ぎたころの春のように暖かい日のことで、十一月ごろ。したがって、「冬」の季語。

9.6. 故事成語

9.6.1. 「肝胆相照らす」

「肝胆」は肝臓と胆嚢のことで、「心の中」の意。
「お互いに信頼して心中を打ち明けることができる」仲をいう。

9.6.2. 「水魚の交わり」

「水と魚のような、非常に親しい付き合い」

9.6.3. 「葦編三絶」

「葦編(いへん)」は文字を書いた竹の札を革紐で綴じた、古代中国の書物。孔子が『易経(えききょう)』を繰り返し読んだため、革紐が三回も切れたという故事から、「本を繰り返し読んだり、熟読する」という意味で使われる。「葦編三度(みたび)断つ」ともいう。

「熱心に読書すること」

9.6.4. 「木に縁りて魚を求む」

木に登って魚を探すという意味。

「方法を間違えると欲しいものが手に入らない」ことをいう。

9.6.5. 「烏合の衆」

「烏の群れのように、統一もなければ規律もない、寄り集まっただけのまとまりのない群衆、または軍勢」

9.6.6. 「瓜田(かでん)に履(くつ)を納(い)れず、李下に冠を正さず」

「人に疑われるような行為は慎め」という教え。

9.6.7. 「玉磨かざれば光なし」

「どんなに素晴らしい素質や才能をもっている、努力しなければ真価を発揮できない」

9.7. 四字熟語

9.7.1. 慇懃無礼 (いんぎんぶれい)

表面上は礼儀正しいが、内心では相手を軽視している態度という意味。

9.7.2. 我田引水 (がでんいんすい)

自分の田にだけ水を引くということから、自分に都合がいいように事を運んだり、説明したりすること。

9.7.3. 一視同仁 (いっしどうじん)

すべてのものをわけへだてせず、同等のものと見なして、同じように愛を与えること。

9.7.4. 隱忍自重 (いんにんじちょう)

じっと我慢して軽はずみな行動をしないこと。

9.7.5. 鎧袖一触 (がいしゅういつしよく)

わずかな力で相手をうち負かすこと。

9.7.6. 一石二鳥 (いっせきにちょう)

ひとつの行いでふたつの利益を得ること。

9.7.7. 一朝一夕 (いっちょういっせき)

ひと朝とひと晩ぐらいのわずかな時間。

9.7.8. 侃々諤々 (かんかんがくがく)

大いに議論する様子。「侃々諤々と議論をたたかわせる」

9.7.9. 喧々囂々 (けんけんごうごう)

大勢が勝手に発言してやかましい様子。「喧々囂々の非難を受ける」

9.8. 上一段活用・五段活用

上一段活用とは、語尾が五十音図のイ段の音(いきしちにひみりゐ)で、未然形(「ない」「う」などがつく)、連用形(「た」などがつく)、連体形(「とき」がつく)、假定形(「ば」がつく)、命令形(「ろ」がつく。文語では「よ」)として活用する動詞。

	活用	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
着る	上一段	(き)	き	き	きる	きる	きれ	きろ
知る	五段	し	ら(ろ)	り(っ)	る	る	れ	れ
散る	五段	ち	ら(ろ)	り(っ)	る	る	れ	れ
似る	上一段	(に)	に	に	にる	にる	にれ	にろ
見る	上一段	(み)	み	み	みる	みる	みれ	みろ

補足:

・動詞の後ろに『～ない』が来ると、

(i)その直前の文字がア段の音に活用(変化)する動詞は、**五段活用**

(ii)その直前の文字がイ段の音に活用(変化)する動詞は、**上一段活用**

(iii)その直前の文字がエ段の音に活用(変化)する動詞は、**下一段活用**

例1: 着る

「着る」+「ない」→「着ない」

「ない」の直前はイ段の音なので、上一段活用

例2: 知る

「知る」+「ない」→「知らない」

「ない」の直前はア段の音なので、五段活用

9.9. 漢字の読み

9.9.1. 久しぶりに恩師の**聲咳**に接した。

「**聲咳**」→「**けいがい**」と読み、「せきばらい」の意味。

「**聲咳に接する**」→「**尊敬している人に会って、直接話を聞く**」

9.9.2. 試合に負けて**臍を噬んで**悔しがった。

「**臍**」→「へそ」とも読むが、「**臍を噬む**」の場合は、「**ほぞ**」と読み、「**及ばないことを悔やむ**」という意味。

「**臍を固める**」の場合も「**ほぞ**」と読む。

9.9.3. その日は**奇しくも**父の命日だった。

「**奇しくも**」→「**くしくも**」と読む。形容詞「奇(く)し」の連用形に助詞の「も」がついた語。「奇し」は「不思議だ」の意味で、「奇しき因縁」などと用いられる。「奇」を「き」と読むのは音読みだが、「奇(く)し」はやまと言葉なので訓読みであることを覚えておこう。

9.9.4. 病人に**白湯**を飲ませる。

「**白湯**」→「**さゆ**」と読む。「白湯(さゆ)」は音読みでも訓読みでもなく、やまと言葉の「さゆ」に漢字を当てた当て字。「**水を沸かしただけで何もいれていない湯**」のこと。

9.9.5. 寺院を**建立**する。

「**功績**を**建立**する」の場合は「**けんりつ**」と読むが、「**寺院**を**建立**する」という場合は呉音(ごおん)読みで「**こんりゅう**」と読む

9.10. 部首名

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 9.10.1. おおざと | 例: 郡 (阝) |
| 9.10.2. こざとへん | 例: 階 (阝) |
| 9.10.3. ころもへん | 例: 補 (衤) |
| 9.10.4. しめすへん | 例: 礼 (礻) |
| 9.10.5. ぎょうがまえ | 例: 衡 (行で囲まれている漢字) |
| 9.10.6. ぎょうにんべん | 例: 後 (彳) |
| 9.10.7. とりへん | 例: 酸 (酉) |
| 9.10.8. ふるとり | 例: 雄 (隹) |
| 9.10.9. したみず | 例: 泰 (氷) |
| 9.10.10. さんずい | 例: 津 (氵) |
| 9.10.11. まきがまえ・けいがまえ | 例: 同 (冂) |
| 9.10.12. つつみがまえ | 例: 旬 (勹) |
| 9.10.13. はこがまえ | 例: 区 (匚) |
| 9.10.14. かくしがまえ | 例: 匚 (匚) |
| 9.10.15. くにがまえ | 例: 国 (口) |
| 9.10.16. がんだれ | 例: 厘 (厂) |
| 9.10.17. まだれ | 例: 店 (广) |
| 9.10.18. やまいだれ | 例: 病 (疒) |
| 9.10.19. わかんむり | 例: 写 (冫) |
| 9.10.20. うかんむり | 例: 宇 (宀) |
| 9.10.21. あなかんむり | 例: 空 (穴) |
| 9.10.22. おいかんむり | 例: 考 |
| 9.10.23. とらかんむり | 例: 虚 (虍) |
| 9.10.24. けいがしら | 例: 互 (互) |

9.10.25. あみがしら

例：置（𠬞）

9.10.26. はつがしら

例：発（𠬞）